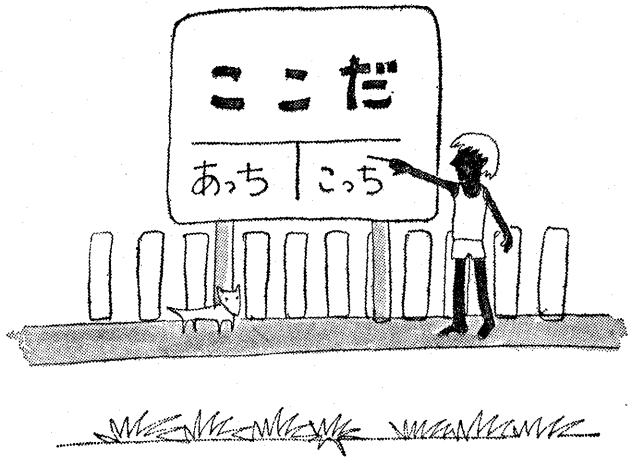


SF的読み解き

子どもという風景

第六回 開かれた地平

堀内 守



選択への誘い

テレビの画面をぼんやり眺めていたら、突然聴き慣れたメロディが流れ出した。

そのメロディは、これからニュースが始まるぞという合図であり、こちらはつい先頃までのぼんやりした状態

から少し緊張した状態に構え直した。改めて考えてみると、テレビの番組にはいろいろな音楽がつきものになっている。ドラマの開始にも、途中にも、終わるときにも音楽が入る。

注意して聴いていると、その音楽のなかには、単純な

メロディの反復のものが多くことがわかる。つまり、いつ、どこで映像が終わってもよいように作られているのである。

楽譜を想像してみよう。起点はきまる。ある基本的なメロディがきまる。次にはそれを反復させる。一小節ごとに、完結した印象を与え、かつ次へ連続する形に仕上げなければならぬ。どこで切られても不自然でないようにするにはいろいろ工夫が必要であろう。

こういう仕組みでできあがっている曲は、実はだんだんふえている。それは完結したメッセージを与えてくれるわけではたいし、作曲者がこの曲に籠めたテーマを一義的に示してくれるわけでもない。鑑賞者がそれを聴いて、さまざまに解釈できるような余地をはじめから含んでいるようなのである。

組合わせ

子どもの遊具のなかにはこの曲相のように、さまざまに部品を組み合わせるような種類のものがある。

なかには、組み合わせの手順が示されている図がついていて、その図に従って組み立てていくと完成するというものもある。しかし、設計図がなく、遊ぶ者が自分で任意に組み立てていくと、そのたびに新奇な形ができあがるというような遊具もある。組み合わせは自由自在、子どもの中に意識的に自由な行為を助長させようとし、彼を無尽蔵の関係の網目の中心として仕立てあげるようにできているのである。だから、この種の遊具で遊ぶには、この関係のまっ只中で自分自身の形を創造することが主眼になる。

設計図を与え、それに従って部品を組み立てられるようにしてあるものとくらべると、設計図のない右の種類の遊具は、自由に創意ある応答を要求するわけである。

面白いことに、この点を古代の人びとも見のがしてはいなかった。例のプラトンは『ソピステス』の中で、以上とよく似た議論をしている。たとえば、画家が画くとき、彼はあがままに（つまり客観的に）描いているのではなく、画を見てくれる人にどう見てもらいたいかに

心を配って描くのだというのである。これは大変面白い議論である。つまり、画というものは画家が自分の解釈を享受者に勝手に押しつけるのではなく、享受者の参加する余地を残しておかなければならないというのだから。

もつとも、この議論のモデルになっているのは、音楽や画そのものというよりも、ドラマであるかもしれない。一つの上演に対して一つの解釈しかないというようなドラマはないだろう。ドラマはその点では実にさまざまな解釈の余地を残している。

寓意の層

ヨーロッパの中世においては寓意解釈の理論が発展する。最初は聖書に関する解釈法だった。のちには詩や絵から彫刻までがその解釈法で幾重にも説明され、解釈されることになる。その解釈の特徴は、単なる字面を超えようとするとところにあった。聖書の一節を字義的に解釈するだけでは足りない。それに加えて寓意的、道徳的、

天上的という三つの文脈で読み取るべきであるというのであった。発端は聖パウロあたりまでさかのぼる。私たちになじみ深いのはダンテの紹介しているものだろう。

読者は多様な意味を読み取り、その時の気分に応じて読み解きの鍵をつかう。そういう都合のよい場合もあるだろうが、寓意解釈の担ったのは先行する解釈をさらに進展させるということであった。

中世に寓意像や寓意図が生み出されたのは偶然ではなかった。動物寓話集は、「動物」についての物語ではなく、「人間」を語っていたのであり、「苦惱」や「飲び」や「笑い」を語っていたのである。これらをきまきりきつた一つの意味に還元することは、寓意の世界の戯れを押し殺すことでもあった。

暗示の詩学

事物を名指すこと、それは詩の楽しみの四分の三を取り去ってしまうことである。このような表現をしたのはマラルメであった。言い換えよう。この発言は、単一の

意味を避けて、語のまわりにいろいろな余白、余地を与えて、不定のくまどりを広げていき、無数の暗示を孕ませようと意図しているのだ。

子どもの発言はこの暗示の詩学によって、常識的な（一義的な）世界からはみ出すことができる。

暗示するとは、単にぼんやりとしてしまうことではない。発言はその都度子ども情緒的で想像的な織り物としてあらわれるのである。私たちは複合的で無尽蔵の生によって活気づけられている。その世界にいくたび訪れても、そのたびに異なった印象を得るように。それは、どこからはじめてもよいということを示唆している。このように読み取れ、とかこのように読み取るべきであるという強制よりも、どこから入って行って、どこから出ても様々な関係や傾向や図柄や紋様が私たちを挑発してくれるような世界なのである。有限であるのに無限であるような世界を前にして私たちは自分自身へ戻って行く。

そのとき私たちの心に湧き起こるのは病的なあいまい

さではあるまい。そうではなくて、このあいまいさのごとく見えるものが私たちに解決方法を考え出すよう迫ってくるという事態に目を向ける必要があるだろう。

子どもへの哲学

二十世紀にいたるまでの思想の範型を眺望するとき、注目されることは、すでに検討したようなできごとがさまざまな分野で生起しているということである。一つの作品に一つの解釈があるわけではない。ある作品は、いろいろに解釈でき、どんな解釈をしてもその作品を汲みつくすことはできない。むしろ、多様な解釈はそれぞれが補ない合って、万華鏡のように新しい作品を生み出していく。

では、事態はあいまいさの中に溶解していつてしまうのであろうか。そうではない。「あいまいさ」ということを考えるとき、私たちはしばしば以前の説明にとらわれがちなのである。習慣は私たちの思考を軽減してくれる。習慣に従ってこの事態を見れば万事が「あいまい」

に見えるような時代になった。ところが、二十世紀に共通する知の動きは、習慣的な見方に安住せず、それを超えたところに身に置いて、慣習や制度によって安定し、沈滞してしまう以前の、みずみずしい可能性をそのまま把握したいというところに向かっている。

平たく言い直そう。あなたは自分が十歳の時、子どもについて考えた。また二十歳になって考える。三十歳になって考え、四十歳になって考え……。そのたびに、「子ども」は異なった現われをしたはずである。つまり、こちらも座標軸を変化させているし、「子ども」も独自の座標軸をもち、時々刻々と変えつつあるのである。

このように解される「あいまいさ」は、量子力学でいう不確定性と非連続性というような概念を思い起こさせるし、また他の一方ではアインシュタインの物理学の世界の状況をも想起させるであろう。

寓話の解釈

さて、冒頭のテレビに戻る。ニュースのあと、チャン

ネルをまわして『狼と子羊』というアニメを見た。この寓話は何度読んでもふしぎな「味」を与えてくれるように思う。それは、「めでたしめでたし」で終わっていないし、「大団円」で完結しているでもない。狼が子羊を食べてしまうというのがオチなのだが、その途中、狼が理由がないのに理由をひねり出すところに不気味さがひそんでいる。

なぜなのか。そもそもできごとの動因に「なぜ？」と問いかけることからプロットが生まれる。プロットは単なるできごとの列挙ではなく、この問いにしたがって、できごとを再構成する。ではなぜ狼は子羊を襲ったのだろう。理由はない。強いていえば、彼の飢えの故である。ではなぜいきなり襲わずに、あれこれ理由を見つけてようとし、子羊がそれについて弁明しはじめると、なぜいらだつのか。

いずれにしても、この物語のプロットは、狼が苦しむぎれに言いがかりをつくり出していくところから生まれている。狼の言いがかりに対し、子羊はこの危機をのが

れようとして、「事実」に従って反論していく。ところが、この反論の根拠が明確であればあるほど、狼はいらだち、ついには有無を言わせぬ形で「理由などない」と言い切る。つまり欲望がむき出しになったのだ。

狼と山羊は子どもの世界でも強者と弱者の寓意である。「狼はけしからん。山羊はかわいそう」というような感想では子どもは納得できないだろう、

それを認めるには勇気がいるが、身のまわりにこの「狼」や「山羊」がわんさといること気づくのはこういう物語を読んでその寓意を読み取る力がついてからである。

両者の会話はどうかろう。狼役のセリフはいろいろな演出が可能である。いかにも乱暴そうな、暴力の持ち主であるかのように終始することもできる。また、反対に、一貫して慇懃^{いんぎん}な口調で続けてもよいだろう。その方が凄みが出るかもしれない。羊役の方はどうかろう。無邪気な声色で応じるか、緊張がしだいに高まっていく形で演出するか、いずれにしても、双方は別口には考えら

れないだろう。両者の掛け合いが問題になるのである。

道徳論的な解釈だけで終わったのではこの寓話の面白さは何分の一かになってしまいうだろう。これは読み方いかんによっては、こんな短かいものなのに、幾通りものやり方がありうる。狼の代わりに山羊を置いて、山羊の代わりに草を置いてみても寓話の構造は変わらない。

狼のシンボルと山羊のシンボル

狼はある時代から残酷な主人公の形象を与えられた。山羊の方は可愛げのある、弱者の形象を与えられた。これには長い歴史がある。山下正男氏によると（『動物と西欧思想』中公新書）、羊のイメージとキリスト教は不離の關係にある。狼は異端者のイメージだった。それに対し、羊はキリスト教徒のイメージになった。ヘブライ的な神は羊飼いのイメージで現われる。

あの寓話に出てきた狼と山羊は、宗教的な關係よりも政治的関係でとらえられる。「迷える羊」よりも、犠牲獣である。そうなるとふたたび宗教的な關係に戻ってし

まうが、狼は、羊が財産、犠牲獣、キリスト者のシンボル、被支配者というような多様なイメージをもっていくのに対し、飢えている肉食獣として形象化されていた。

これらを丹念にたどっていくと、この物語にたった一匹だけあらわれる子羊は、群から離れた「迷える子羊」であるということにもなりうるだろう。英語の *sheep* は単数でもあり、同時に複数でもある。それは羊が群れをなしている動物であることから生まれた表現であるに違いない。こんなことから「群を勝手に離れたらいけない」という教訓譚にも仕立てあげられた。

この物語を何度も読んでいくうち、しだいに狼は雄であり、子羊はしだいに中性に近づいていく。厳密にいえば、雄でも雌でもない、それを超えた中性に思えてくる。会話がそうつくられているからである。もう少しセリフが短かくもなる。

狼や羊に対するイメージは、実物を見る前にこうして形づくられていく。だから、子どもがホンモノの羊に出

会うと、イメージとホンモノとの間があまりにも違うものだから、羊に恐れをなすこともありうる。現にそれと同じことがウサギやヤギについても起こっている。

狼が^{どうぶつ}擽猛な動物であるという思い込みは、やはりこの種の物語から形づくられていく。『赤づきんちゃん』はその典型だろう。

少し観点を変えてみる。

狼は家畜ではなかった。これに対し、羊は飼う動物として古い時代から人間のさまざまなシンボルとなった。

羊は、食糧として、衣服として人間にさまざまな形で役立つてきた。野性と飼育という分離がこの物語に影響を及ぼしている。かりに、農耕に従事していた集団がいたとする。そこへ羊の群を連れ別別の集団がやってきたとする。当然、この狼と子羊と同じような関係が出来^{もつた}るかもしれない。

人間を動物にたとえて理解する傾向が一方にあり、他方に植物にたとえて理解する傾向がある。これらに野生と飼育の双方を加えてみるとどうなるだろうか。

羊の群は、番犬と羊飼いでよって集团的に統御されている。狼は調教の利かない、不気味な森にひそみ、人間の家のまわりを徘徊する。

異教徒、見ず知らずの者、野盗の群、あるいは軍隊これらが「狼」のイメージと結びついていき、「羊」の方は、キリスト教徒や定住生活者のイメージに近寄っていく。子どもはこれらの境界に位置づけられる不安定な存在と見なされる。放っておけば、野獣化し、雑草のようになってしまう。これを「調教」し、「栽培」していくには、管でビシビシ鍛えるやり方もある。手をかけ、目をかけて芽が出て花が咲かせるのを傍で待機するスタイルもある。

子どもの隠喩体系

子どもはこのような隠喩のなかでようやく姿をあらわす。当初はまことに断片的であった。ガツガツ食べているだけであると見なされると「餓鬼」と呼ばれる。この音とこのイメージ（地獄につながるイメージだ）の歴史

も長い。

一家の食糧が限られているところから「穀つぶし」とも称せられた。

「口減らし」のために奉公にやられる。

「波風荒きこの世間」に生きていくにはまことに容易なことではなかった。

『狼と子羊』の物語は、ことによると、このような一連のタームとともに解釈し直されるのではないか。「飢鬼」「穀つぶし」「口減らし」それに「世間」。

狼は、ナマの飢えのシンボルであった。いろいろ理由をつくり出す強者のシンボルでもあった。子羊は正論をのべたてたが、最後には娘に食べられてしまう。いったいどちらが子どもに近いのか。ここでも相対論が必要になる。つまり、子どもは狼に近づけて解釈されたり、小羊にひきつけて解釈されることも可能なのである。

「子宝」「みどりこ「みどりこ「産児」——その他、もろもろの表現がある。しかし、これらの子どもの一面をスナップ写真のように瞬間的にしかとらえていないのではなからうか。

ハイスピード映写

歴史を足早に通り過ぎていくと、子どものイメージは古典的形式のもつ静的なものから動物なものの方に変わりつつあることがわかる。ただし、それなるが故に子どもの輪郭はたえず姿を変えつつあるということでもある。

充実と空虚の交替、明と暗、それらはつねにいっしょにあらわれ、私たちを驚かす。瑣末な論議をつき抜けて、子ども像は豊饒な風景を呈しはじめている。

ここに入る者はかならず驚異に目を見開かされ、いつのまにかさまざまな思想、世界、態度の交差する四辻に立つてあることになるだろう。子どもは、多様な角度から見ることでできる小宇宙をなしているが、その小宇宙はもはや一貫した決定論にしたがって動いてはいない。私たちがどのように、どちらの角度から、どのような距離で近づくかによって、別様に見えてくるのだから。

私たちは、子どもを認識する、ということに力をかけず

ぎてきた。力点の置き方を変えなければならない。『狼と子羊』に戻ってみると、あの短かい物語のプロットが意外にも緊張がしだいに盛りあがっていくドラマの典型をなしていることから、今日話題にされている「いじめ」の問題にもそれを通して光を当てることができるのである。理由のないときには理由もつくり出しうる立場にいる。「いじめ」の理由を外に求め、有力な原因を一つだけさぐるうとしても無駄であろう。

手がかりは、理由のないときにかなる理由を、でっちあげるか——それを当の強者が強さの証と知っているか、弱さの証と知っているか、そこまで見ていかななくてはならない。

それは隠喩体系を読み解くのに似ているだろう。

子どもの小宇宙はこうして二十世紀の知の体系の転換を両義的に上演しつつあるように思える。

(名古屋大学)